

大阪大学言語社会学会

EX ORIENTE Vol.22 抜刷

2015年3月31日 発行

◎特集 東南アジア大陸部諸言語研究の最前線

## ビルマ語の事象キャンセル

加藤昌彦

## ビルマ語の事象キャンセル

加藤昌彦

### 1. 序論

本稿の目的は、ビルマ語の事象キャンセル (event cancellation) の様相を詳細に記述することと、この現象が可能になる条件を探ることである。ビルマ語の検討に入る前にまず、日本語の事象キャンセルを概観する。日本語研究において、この現象はこれまで活発に論じられてきた。池上 [1981: 266-67] は、日本語では (1) のような表現が可能であるのに対し、英語の同様の表現 (2) は許容されないことを指摘した。

(1) 燃やしたけど、燃えなかった。

(2) \**I burned it, but it didn't burn.*

「燃やす」という日本語の他動詞は、その論理構造の中に、何らかの使役動作によって引き起こされる結果としての「燃える」という事象を含むと考えられる。しかし、(1) では、動詞「燃やす」が過去形を取っているにもかかわらず、そのような結果の実現を含意 (entail) しないのである。このように、日本語では時として、動詞の意味に含まれる結果の実現が含意されないことがあ

る。事象キャンセル (event cancellation) と呼ばれるこの現象は、後に、宮島 [1985]、Ikegami [1985]、影山 [1996]、Tsujiura [2003]、山川 [2004]、佐藤 [2005] などによって論じられてきた。これと同様の現象がビルマ語にも見られる。

池上は他にも (3) や (4) のような例を挙げている。一方、事象キャンセルが不可能な場合もあるとして、(5) を挙げている。

(3) 沸かしたけれど、沸かなかった。

(4) 船を浮かべたけれど、浮かばなかった。

(5) \*彼を殺したけれど、死ななかった。

これらに対応する英語は、次のとおり、容認されない。

(6) \*I boiled it, but it didn't boil.

(7) \*I floated the boat, but it didn't float.

(8) \*I killed him, but he didn't die.

しかし、英語でも事象キャンセルが可能な場合がある。池上は、(9) の日本語に対応する (10) の英語は容認されると言う。池上は、日本語と英語とで事象キャンセルの成立可否に食い違いがある場合、常に、日本語のみが容認可能であると指摘している。

(9) 彼を招いたけれど、来なかった。

(10) I invited him, but he didn't come.

日本語で事象キャンセルが可能になる理由や条件については、様々な議論がなされてきた。池上 [1981] は、日本語を〈なる〉的な言語 (BECOME-language) と捉え、英語を〈する〉的な言語 (DO-language) と捉える。そしてその類型の中でこの現象を説明しようとする。影山 [1996: 275-291] は、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) を用いて事象キャンセルを説明する。すなわち、(11) のように表される構造において、英語では ACT ON に視点が置かれ、日本語では BECOME に視点が置かれることが両言語間の違いを生じさせているとする。

(11) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]

Tsujiura [2003] は、日本語の語彙的使役動詞 (lexical causative verbs) が、限界性 (telicity) に関して未指定 (underspecified) であるため、事象キャンセルが可能だとする。山川 [2004] は、日本語の事象キャンセルの容認可否について検討しており、影山 [1996] と同様に LCS を用いて、BE AT の部分が表す状態の種類の違い、すなわち、スケールの限界点に基準が置かれるか (trivial standard)、あるいは基準が文脈依存であるか (nontrivial standard) によって許容度が条件付けられると考え、前者の場合にはキャンセルが不自然になるとする。佐藤 [2005: 99-113] は、[AGENT:ACT] + [THEME:ACHIEVEMENT] と表示できるような意味を持つ動詞が、メトニミーの作用によって [AGENT:ACT] のみを表したときに、事象キャンセルが可能になると考える。

日本語の事象キャンセルが可能になる理由がいかなるものであるにせよ、この現象を考えるにあたって留意しておかなければならないことがある。それは、事象キャンセルに対する容認度が話者によって大きく異なり得るということである。宮島 [1985] は、この問題に関して重要な調査を行っている。宮島が調査に用いた例文から2例を下に引用する。

(12) 木の枝を燃やしたけれど、燃えなかった。

(13) 太郎は次郎を殺したけれど、次郎は死ななかった。

宮島は、事象キャンセルを含む様々な文を被調査者に示し、どのように感じるかを、「自然」「やや不自然だが使われる」「まったく不自然」の3つの選択肢から選ばせた。その結果、被調査者100人のうち、(12)は、「自然」が30人、「やや不自然だが使われる」が48人、「まったく不自然」が22人であった。一方、(13)は、「自然」が7人、「やや不自然だが使われる」が18人、「まったく不自然」が75人であった。つまり、池上[1981]が容認されると見なした(1)に類似する(12)の文に対して、100人中70人が多かれ少なかれ不自然さを感じ、逆に、容認されないとした(5)に類似する(13)の文を、100人中7人が自然と判断したということである。私自身も何人もの日本語話者に様々な文例を示して尋ねてみたことがあるが、事象キャンセルに対する判断は一様でないと感じる。

事象キャンセルはビルマ語にも見られる。ビルマ語の場合、事象キャンセルは日本語よりもはるかに自然であることが多い。(14)と(15)では、最初の文で述べた動作の結果を二番目の文で否定している<sup>1</sup>。おそらく、ほとんどすべてのビルマ語母語話者は、(14)や(15)の文連続を自然だと考えるであろう。

(14) *mí cò=dè. dà=bèmê mǎ-làuv=bú.*  
fire burn(vt)=REAL this=though NEG-burn(vi)=NEG  
「燃やした。しかし、燃えなかった」

(15) *tú=gò tǎ²=tè. dà=bèmê mǎ-tè=bú.*  
3sg=KO kill=REAL this=though NEG-die=NEG  
「彼を殺した。しかし、死ななかった」

さらに、ビルマ語では、次のような、動作そのものを否定しているように見える事象キャンセルも可能である。

(16) *thá=dè. dà=bèmê thá=lò mǎ-yá=bú.*  
stand.up=REAL this=though stand.up=LO NEG-get=NEG  
「立った。しかし、立つことができなかった」

これまで、ビルマ語の(14)や(15)のような現象については、既に、ティンエイエイコ[2002: 124-125]が指摘しているが、その成立条件については明確にしていない。また、(16)のように動作そのものをキャンセルする現象について指摘した先行研究はないようである。本稿では、(14)(15)(16)に示したような事象キャンセルが可能になる原因は、ビルマ語の意志動詞(volitional verb)の意味的特性であることを指摘する。

## 2. ビルマ語の動詞分類

本稿で扱う問題を論じるにあたり、ビルマ語の動詞の分類を示しておく必要がある。ビルマ語の動詞は語彙アスペクト(lexical aspect)に基づき、図1のように分類することができる<sup>2</sup>。動詞はまず動態動詞(dynamic verb)と状態動詞(stative verb)に分かれる。この用語法はWheatley[1982: 61-62, 86]に倣った。概ね、動態動詞はVendler[1967]のactivity、accomplishment、achievementを表し、状態動詞はstateを表すと言える。動態動詞と状態動詞を判別するための一つのテストは、動詞がrealisを表す助詞=*tè*/*dè*<sup>3</sup>と共起したときに、発話時点において継続している事象を表せるかどうかを見ることである。この時、習慣的(habitual)な事象は発話時点において継続する事象と見なさない。状態動詞は発話時点において継続している事象を表せるが、動態動詞は過去の事象を表す。例えば、*hlá*「美しい」は*hlá=dè*が「(今)美しい」の意味を表せるので状態動詞であるが、*ká*「踊る」は*ká=dè*が「(今)踊っている」

る」の意味を表さず、「踊った」の意味になるので動態動詞である。

さらに動態動詞は、activityあるいはaccomplishmentを表す活動動詞 (activity verb) と、achievementを表す変化動詞 (achievement verb) に分けることができる。この2つを判別するための一つのテストは、動作継続 (continuing action) や結果継続 (resulting state) を表す助動詞 =*nè* 「(～し) ている」と共起したときに表す意味の違いである。活動動詞は、=*nè* と共起したとき、動作継続のみを表し、結果継続を表さない。一方、変化動詞は、=*nè* と共起したとき、動作継続を表すこともあるが、結果継続をも表し得る。例えば、*kâ=nè=dè* (dance=PROG=REAL) 「踊っている」や *yai? =nè=dè* (strike=PROG=REAL) 「叩いている」は動作継続のみを表し、結果継続を表さないので、*kâ* 「踊る」と *yai?* 「叩く」は動態動詞である。しかし、例えば動詞 *pye?* 「壊れる」を用いた *pye? =nè=dè* 「壊れている」は二つの意味を持つ。一つは「壊れる過程にある」という意味すなわち動作継続で、もう一つは、「壊れた結果が継続している」という意味すなわち結果継続である。*pye?* は後者の意味を表せるので、変化動詞である。

語彙アスペクトに加えて、ビルマ語のすべての動詞は、加藤 [2010] が指摘したとおり、意志性 (volitionality) に基づいて、意志動詞 (volitional verb) と無意志動詞 (non-volitional verb) に分けることができる。意志動詞は意志を伴う事象を表し、無意志動詞は意志を伴わない事象を表す。この区別はビルマ語において非常に明確である。例えば、*mè=dè* (forget=REAL) 「忘れた」という文は、無意識に忘れたことを常に表し、「わざと忘れる」という状況を表すことができない。これは *mè* 「忘れる」が無意志動詞だからである。もし意志



図1 ビルマ語動詞の分類

的に忘れたという状況を表したければ、決意 (decisiveness) を表す助動詞の =*lai?* を用いて、*mè=lai?=dè* 「忘れてやった」のように言う必要がある。逆に、意志動詞 *kàiv* 「触る、つかむ」を用いた *kàiv=dè* (touch=REAL) 「触った」という文は、意志的に触ったという状況しか表すことができない。もし無意識のうちに触ってしまったことを表したければ、非意図性 (inadvertency) を表す助動詞の =*mí* (=hmi) を用いて、*kàiv=mí=dè* 「(うっかり) 触ってしまった」のように言う必要がある。意志動詞と無意志動詞を判別する一つのテストは、助動詞の =*lwè* 「(～し) やすい、(～し) がちだ」と共起するか否かである。無意志動詞は *mè=lwè=dè* 「忘れやすい、忘れっぽい」のように *lwè* と共起するが、意志動詞は共起しない。もうひとつは、スケールの限界点への到達を表す助動詞 =*twá* 「(～し) てしまう」と共起するか否かである。動詞 *twá* 「行く」に由来するこの助動詞と、無意志動詞は共起するが、意志動詞は共起しない。例えば、無意志動詞 *mè* 「忘れる」は、*mè=twá=dè* 「忘れてしまった」のように、この助動詞と共起する。しかし、意志動詞はこの助動詞とは共起しない。意志動詞の後に *twá* が現れることもあるが、これは助動詞ではなく、「行く」を表す動詞である。したがって、意志動詞 *sá* 「食べる」を用いた *sá twá=dè* は、「食べて行った」という意味を表す。

語彙アスペクトと意志性には相関関係がある。意志動詞の割合は、活動動詞、変化動詞、状態動詞の順で、少なくなっていく。参考のため、服部編 [1957] に基づいて私が作成したビルマ語基礎動詞リスト (全 401 個) に現れた動詞の数を示す。活動動詞は全 202 個のうち、意志動詞が 185 個 (約 92%)、無意志動詞が 17 個 (約 8%) であった。変化動詞は全 71 個のうち、意志動詞が 12 個 (約 17%)、無意志動詞が 59 個 (約 83%) であった。状態動詞は全 128 個のうち、意志動詞は *nè* 「居る」一個のみ (約 1%)、残りの 127 個 (約 99%) は無意志動詞であった。

さらに、本稿ではもう一つの分類を付け加える。それは、動詞が助詞 (particle) =*kò/=gò* を後置できる名詞句を取るか否かである。助詞 =*kò/=gò* は、patient, theme, recipient, goal などの意味役割を示す働きがある。下に例を示す。

この助詞は、先行する名詞が人間でない限り、現れなくともよいので、そのような場合は括弧にくくってある。

(17) *ʔédi zābwé(=gò) yaiʔ=tè.*  
that desk=KO strike=REAL  
「その机を叩いた」

(18) *ʔédi ɲá(=gò) hluʔ=tè.*  
that fish=KO set.free=REAL  
「その魚を放した」

(19) *māhlā=gò sàʔouʔ pé=dè.*  
(personal.name)=KO book give=REAL  
「マ・フラに本をやった」

(20) *ʔédi myò(=gò) tʔwá=dè.*  
that town=KO go=REAL  
「その町に行った」

本稿では、(17) (18) (19) (20) のように =kò/=gò を後置し得る名詞句を目的語と呼び、そのような名詞句を取り得る動詞を他動詞と呼ぶことにする。そしてそれ以外の動詞を自動詞と呼ぶ。ただ、Sawada [1995] が指摘するように、=kò/=gò を後置し得るか否かという基準を除くと、目的語を設定するための統語的基準をビルマ語に見出すことは難しい。したがってビルマ語に自動詞・他動詞の区別を認めることに疑いが生じるのだが、本稿では、=kò/=gò を後置し得るという特徴を最大限に重視し、この基準に基づいて自動詞・他動詞の区別を行う。なお、(19) の *pé* のような複他動詞 (ditransitive verb) の場合、普通は受領者 (recipient) 項に =kò/=gò が後置される。しかし、もし受領者項が節

中に存在しなければ、対象 (theme) 項に =kò/=gò を後置することが可能である。したがって (19) では、もし *māhlā* が文中になければ、*sàʔouʔ* に =kò/=gò を後置することができる。このような動詞の場合、どちらの名詞句も目的語と見なす。

上記のような観点で分類した動詞の例を (21) に示す。[1] 活動動詞、[2] 変化動詞、[3] 状態動詞の順で例を挙げ、それぞれを [a] 意志動詞と [b] 無意志動詞に分類してある。さらに、それらを自動詞と他動詞に分けた。なお、このリストには「名詞+動詞」からなるイディオムも含む。

## (21) 動詞分類

### [1] 活動動詞 (activity verbs)

#### [1-a] 意志 (volitional)

〈自動 (intransitive)〉: *cauʔ* 「歩く」、*hlouʔ* 「揺れ動く」、*khòun* 「跳ぶ」、*ná* 「休む」、*pyàv* 「飛ぶ」、*pyóuv* 「微笑む」、*pyé* 「走る；逃げる」、*twá* 「這う」、*yè kú* 「泳ぐ」、*yì* 「笑う」

〈他動 (transitive)〉: *ceiʔ* 「挽く」、*chá* 「落とす」、*chauʔ* 「脅す」、*chèiv* 「量る」、*cheʔ* 「煮る」、*chì* 「結ぶ」、*chó* 「折る」、*chuʔ* 「脱ぐ」、*cí* 「見る」、*cò* 「沸かす」、*cò* 「揚げる」、*cà* 「探す」、*cwè* 「動かす」、*hláv* 「干す」、*hlé* 「倒す」、*hluʔ* 「放す」、*hmà* 「命令する」、*hmaʔ* 「覚える」、*hmyiv* 「上げる」、*hnó* 「目覚めさせる」、*hnouʔ* 「抜く」、*hyá* 「借りる」、*hɲiʔ* 「絞る」、*ká* 「踊る」、*kàiv* 「触る、つかむ」、*kaiʔ* 「咬む」、*kàn* 「蹴る」、*kaʔ* 「貼り付ける」、*khauʔ* 「畳む」、*khiv* 「敷く」、*khó* 「盗む」、*khò* 「呼ぶ」、*khwà* 「引き離す、剝く」、*khwé* 「割る」、*kiv* 「焼く」、*kouʔ* 「搔く」、*kùni* 「手伝う」、*kú* 「渡る」、*kú* 「治す」、*là* 「来る」(有生主語の場合)、*laiʔ* 「追う」、*lèiv* 「だます」、*louʔ* 「する、行う；作る」、*lú* 「奪う」、*má* 「持ち上げる」、*mé* 「尋ねる」、*mí cò* 「燃やす」、*mwé* 「飼う」、*mwé* 「生む」、*ná thàun* 「聞く」、*niv* 「踏む」、*páuv* 「蒸す」、*pé* 「与える」、*peiʔ* 「閉める」、*phaʔ* 「読む」、*phí* 「圧す」、*phweʔ* 「隠す」、*phyé* 「ほどく」、*phwiv* 「開ける」、*phyaʔ* 「(刀状のもので) 切る」、*phyé* 「裂く」、*phyéʔ*

「壊す」、*pó* 「送る」、*pu?* 「こする」、*pyá* 「示す、見せる」、*pyàn* 「帰る」、*pyìn* 「直す」、*pyi?* 「投げる；撃つ；捨てる」、*pyó* 「話す」、*sá* 「食べる」、*sai?* 「植える」、*sáun* 「待つ」、*shau?* 「建てる」、*shé* 「(手などを) 洗う」、*shín* 「おりる」(有生主語の場合)、*shou?* 「握る」、*shou?* 「破く」、*shù* 「叱る」、*shwé* 「引く」、*sí* 「乗る」、*sínzá* 「考える」、*sou?* 「吸う」、*táun* 「(物品などを) 頼む」、*ta?* 「取りつける」、*te?* 「上がる、登る」(有生主語の場合)、*thán* 「担ぐ」、*thá* 「置く」、*thàun* 「立てる」、*thé* 「入れる」、*thó* 「突き刺す」、*thou?* 「包む」、*thou?* 「出す」、*thùn* 「耕す」、*tú* 「掘る」、*tún* 「押す」、*ta?* 「殺す」、*tau?* 「飲む」、*tè* 「運ぶ」、*tìn* 「教える；習う」、*tóun* 「使う」、*tou?* 「拭く；塗る」、*twá* 「行く」(有生主語の場合)、*wá* 「かむ」、*wè* 「買う」、*wu?* 「着る」、*yai?* 「殴る」、*yáun* 「売る」、*yei?* 「刈る」、*ye?* 「編む」、*yé* 「書く」、*yì* 「数える」、*yù* 「取る」、*ou?* 「覆う」

## [1-b] 無意志 (non-volitional)

〈自動 (intransitive)〉: *cháun shó* 「咳をする」、*láv* 「ぎょっとする」、*lè* 「回転する」、*le?* 「光る」、*myó* 「浮かんで流れる」、*nyò* 「泣く」、*táv* 「あくびする」

〈他動 (transitive)〉: *cá* 「聞こえる」、*là* 「来る」(無生主語の場合)、*làun* 「燃える」、*myìn* 「見える」、*nàin* 「勝つ」、*twá* 「行く」(無生主語の場合)、*av* 「吐く」

## [2] 変化動詞 (achievement verbs)

## [2-a] 意志 (volitional)

〈自動 (intransitive)〉: *hlé* 「横になる」、*ma?ta? ya?* 「直立する」、*sú* 「集まる」、*thá* 「立ち上がる」、*thàin* 「座る」、*éi?* 「就寝する」

〈他動 (transitive)〉: *sá* 「始める」、*thwe?* 「出る」(有生主語の場合)、*wìn* 「入る」(有生主語の場合)

## [2-b] 無意志 (non-volitional)

〈自動 (intransitive)〉: *cá* 「落ちる」、*càn* 「残る」、*ce?* 「煮える」、*có* 「折れる」、*ka?* 「くつつく」、*khé* 「固まる」、*kwá* 「剥がれる」、*kwé* 「割れる」、*lé* 「倒

れる」、*myou?* 「沈む」、*nó* 「目覚める」、*néin* 「(火が) 消える」、*pau?* 「生える」、*pei?* 「しまる」、*pháun* 「膨らむ」、*pou?* 「腐る」、*phei?* 「こぼれる」、*pi* 「終わる」、*pwîn* 「あく」、*pyau?* 「無くなる；治る」、*pyân* 「拡散する」、*pya?* 「切れる」、*pyè* 「ほどける」、*pyé* 「裂ける」、*pye?* 「壊れる」、*pyò* 「溶ける」、*sou?* 「破ける」、*tó* 「増える」、*tè* 「死ぬ」、*yò* 「減る」

〈他動 (transitive)〉: *dótá phyi?* 「怒る」、*dábó pau?* 「分かる」、*dādī yá* 「思い出す」、*mè* 「忘れる」、*thí* 「触れる」、*twè* 「見つける」、*yá* 「得る、入手する」、*yau?* 「着く」

## [3] 状態動詞 (stative verbs)

## [3-a] 意志 (volitional)

〈自動 (intransitive)〉: *nè* 「住む；居る」

〈他動 (transitive)〉: (該当なし)

## [3-b] 無意志 (non-volitional)

〈自動 (intransitive)〉: *chau?* 「乾いた」、*chò* 「甘い」、*cí* 「大きい」、*èè* 「長い」、*éi* 「存在する」、*dábó káun* 「優しい」、*háun* 「古びた」、*hlá* 「美しい」、*hmá* 「間違っている」、*hmàn* 「正しい」、*hmàun* 「暗い」、*hné* 「のろい」、*káun* 「良い」、*kau?* 「曲がっている」、*khá* 「苦い」、*khé?* 「難しい」、*kwé* 「曲がっている」、*lé* 「重い」、*lèinmà* 「利口な」、*lín* 「明るい」、*lwè* 「易しい」、*mà* 「固い」、*mai?* 「愚かな」、*mé* 「黒い」、*mó* 「疲れた」、*myá* 「多い」、*myàn* 「速い」、*myìn* 「高い」、*nà* 「痛い」、*néin* 「低い」、*né* 「少ない」、*nì* 「赤い」、*ní* 「近い」、*ni?pa?* 「汚い」、*pèin* 「瘦せた」、*phyù* 「白い」、*pò* 「軽い」、*pù* 「(客観的に) 熱い」、*pyá* 「青い」、*pyò* 「柔らかい」、*séin* 「生の」、*shó* 「悪い」、*sò* 「濡れた」、*tò* 「短い」、*tò* 「優秀な」、*táv* 「丈夫な」、*té* 「小さい」、*tí?* 「新しい」、*wá* 「太った」、*wé* 「遠い」、*yáin* 「乱暴な」、*yótá* 「正直な」、*éé* 「(客観的に) 寒い」

〈他動 (transitive)〉: *cai?* 「好む」、*cau?* 「恐がる」、*chi?* 「愛する」、*ce?* 「恥ずかしがる」、*hma?mí* 「覚えている」、*lò* 「必要な」、*móun* 「嫌う」、*tí* 「知っている」、*ná lé* 「分かっている」、*pàin* 「所有する」、*sei? pù* 「心配する」、*sei? shó*

「怒る」、*sóyèiv* 「心配する」、*ta?* 「できる」

### 3. 結果キャンセル (result cancellation)

Tsujimura [2003] によれば、日本語における事象キャンセルは、(1) の例に示した「燃やす-燃える」のように形態的に関係のある他動詞と自動詞の対があるとき典型的に観察される。早津 [1989] は、対となる自動詞を持つ他動詞を有対他動詞と呼ぶ。早津は、こうした他動詞と自動詞の対として、例えば、「折る-折れる」「切る-切れる」「焼く-焼ける」「落とす-落ちる」「止める-止まる」「消す-消える」「壊す-壊れる」「流す-流れる」「入れる-入る」など、非常に多くの例を挙げている。

Cornyn and McDavid [1943] が示したように、ビルマ語にも形態的に関係のある他動詞と自動詞の対がたくさんある。Cornyn and McDavid は 70 対以上の例を示している。ビルマ語の場合、*chau?* 「脅す」と *cau?* 「恐がる、恐れる」のようにどちらも他動詞である場合があるので、他動詞対自動詞というよりは、causative 対 non-causative と呼ぶほうが正確である。下に例を挙げる。

(22) Causative	Non-causative
<i>chá</i> 「落とす」	<i>cá</i> 「落ちる」
<i>chau?</i> 「脅す」	<i>cau?</i> 「恐がる」
<i>che?</i> 「煮る」	<i>ce?</i> 「煮える」
<i>chó</i> 「折る」	<i>có</i> 「折れる」
<i>hlé</i> 「倒す」	<i>lé</i> 「倒れる」
<i>hmyiv</i> 「高くする」	<i>myiv</i> 「高い」
<i>hnó</i> 「目覚めさせる」	<i>nó</i> 「目覚める」
<i>ka?</i> 「くつつける」	<i>ka?</i> 「くつつく」
<i>khau?</i> 「折る」	<i>kau?</i> 「曲がっている」
<i>pei?</i> 「閉める」	<i>pei?</i> 「閉まる」

<i>phwiv</i> 「開ける」	<i>pwiv</i> 「開(あ)く」
<i>phye?</i> 「壊す」	<i>pye?</i> 「壊れる」

これらの例から分かるように、頭子音の有気：無気の対立（例えば /ch/ vs. /c/, /kh/ vs. /k/）あるいは無声：有声の対立（例えば /hl/ vs. /l/, /hm/ vs. /m/）が、causative verb と non-causative verb の対応に関わっていることが多い。ただし、*ka?* 「くつつける」「くつつく」や *pei?* 「閉める」「閉まる」のように、2つの動詞が同形の場合<sup>4</sup>もある。また、形態的に無関係であるが、意味的に対応する次のような動詞対もある。

(23) Causative	Non-causative
<i>có</i> 「燃やす」	<i>láv</i> 「燃える」
<i>ta?</i> 「殺す」	<i>tè</i> 「死ぬ」
<i>hláv</i> 「干す」	<i>chau?</i> 「乾く」

これらの対における causative verb に共通する特徴は、みな意志動詞だということである。一方の non-causative verbs はすべて無意志動詞である。

*chá* 「落とす」と *cá* 「落ちる」を例にとって、(24) と (25) に causative と non-causative の例文を挙げておく。(25) で名詞 *khwe?* に後続する助詞 =*ká* は、主語を表すなどの機能を持つ。必須要素ではないので、括弧でくくってある。

(24) <i>ʔédi khwe?(=kò) chá=dè.</i>
that cup=KO drop(vt)=REAL
「そのコップを落とした」

(25) <i>ʔédi khwe?(=ká) cá=dè.</i>
that cup=KA drop(vi)=REAL
「そのコップが落ちた」



ビルマ語では、上に示したような causative verb と non-causative verb の対を用いて、(26) から (31) のような文連続を自由に作ることができる。すなわち、最初の文の causative verb がその論理構造の中に含む結果を、non-causative verb を用いた後続する否定文がキャンセルするような文連続である。既に示した (14) と (15) も同様の例である。(31) のように causative verb と non-causative verb が同形である場合も、このような文連続が問題なく可能である。

(26) *chā=dē.      dā=bēmē      mǎ-cā=bú.*  
 drop(vt)=REAL    this=though    NEG-drop(vi)=NEG  
 「落とした。しかし、落ちなかった」

(27) *chó=dē.      dā=bēmē      mǎ-có=bú.*  
 bend(vt)=REAL    this=though    NEG-bend(vi)=NEG  
 「折った。しかし、折れなかった」

(28) *hlé=dē.      dā=bēmē      mǎ-lé=bú.*  
 knock.down=REAL    this=though    NEG-fall.down=NEG  
 「倒した。しかし、倒れなかった」

(29) *phwīv=dē.      dā=bēmē      mǎ-pwīv=bú.*  
 open(vt)=REAL    this=though    NEG-open(vi)=NEG  
 「開けた。しかし、開かなかった」

(30) *phyeʔ=tē.      dā=bēmē      mǎ-pyeʔ=phú.*  
 destroy=REAL    this=though    NEG-break(vi)=NEG  
 「壊した。しかし、壊れなかった」

(31) *kaʔ=tē.      dā=bēmē      mǎ-kaʔ=phú.*  
 attach=REAL    this=though    NEG-attached=NEG  
 「くっつけた。しかし、くっつかなかった」

このようなキャンセルが常に可能であることから、これらの causative verb がその論理構造に含む結果は、現実法 (realis) の環境であっても、意味論的に実現が含意 (entail) されないことが分かる。本稿ではこれを結果キャンセル (result cancellation) と呼ぶ。語用論的には、これらの例の最初の文は結果の成立を暗示することもある。もしこれらの文の後に結果をキャンセルする文が続かなければ、聞き手はしばしば結果が生じたと理解する。しかし、意味論的には結果は表されていないのである。結果が生じたことを明示したい場合には、例えば次のような文を使用する必要がある。

(32) *chā=lô      cá=dē.*  
 drop(vt)=because    drop(vi)=REAL  
 「落としたので落ちた」

東南アジアの言語では、例えば Thepkanjana and Uehara [2009] がタイ語について示したように、結果を動詞連続によって表すことがある。ビルマ語にも動詞連続が存在するが、結果を次のような動詞連続で表すことはできない。なぜなら、澤田 [1988] が指摘したとおり、ビルマ語の動詞連続には主語が同一でなければならないという制約があるからである。

(33) \* *chā      cá=dē.*  
 drop(vt)    drop(vi)=REAL

## 4. 動作キャンセル (action cancellation)

前節では、ビルマ語で causative verb の結果が含意されないことを示した。この節では少し異なる現象を扱う。(34) を見られたい。2 番目の文の *thá=ló mǎ-yá=bú* の部分には、*V=ló yá* 「(~する) ことができる」という状況可能 (external ability) を表すイディオムが使われている。*yá* は「得る (get)」の意を表す動詞である。従属節標識の *=ló* は、動詞と *yá* を結びつけるアダプターとして機能している。*V=ló yá* を否定すると *V=ló mǎ-yá=bú* 「(~する) できない」となる。

- (34) *thá=dè. dà=bèmê thá=ló mǎ-yá=bú. (=16)*  
 stand.up=REAL this=though stand.up=LO NEG-get=NEG  
 「立った。しかし、立つことができなかった」

一見して奇妙なことに、この例では、最初の文で「立った」と言っているのに、2 番目の文で「立てなかった」と言っている。すなわち、動作そのものをキャンセルしているように見える。*V=ló yá* の部分は、同様に状況可能を表す助動詞 *=hnàiv* を用いて (35) のように言い換えることも可能である。

- (35) *thá=dè. dà=bèmê mǎ-thá=hnàiv=bú.*  
 stand.up=REAL this=though NEG-stand.up=can=NEG  
 「立った。しかし、立つことができなかった」

このような現象を本稿では動作キャンセル (action cancellation) と呼ぶことにする。しかしながら、正確に言うならば、(34) では動作の過程全体がキャンセルされているわけではない。この例が表す状況は、例えば次のようなものである：「私は最初椅子に座っていた。次に私は立とうとして腰を椅子から浮

かした。しかし、脚が痛かったなどの理由で、直立した状態に至らなかった」。したがって、最初の文の *thá=dè* は、この動詞が表す動作を途中まで遂行したことを表しており、2 番目の文の *thá=ló mǎ-yá=bú* は、動作の終端 (end point) である「直立した状態」に至らなかったことを表しているのである。すなわち、キャンセルされたのは、動作の過程すべてではなく、終端の部分のみである。その結果、(34) は論理的な矛盾を生じずに済んでいる。この文にもし状況可能を表す形式を用いなければ、次の例のように、許容できない表現ができあがる。

- (36) \* *thá=dè. dà=bèmê mǎ-thá=bú.*  
 stand.up=REAL this=though NEG-stand.up=NEG  
 「立った。しかし、立たなかった」

状況可能を表す形式の否定形がなぜ終端のみを否定できるのかという問題は、本稿で扱える範囲を越えているので、ここでは論じない。重要なことは、終端が否定されても論理的な矛盾を生じないという事実である。

動作キャンセルにおいて注意すべきことは、この現象が無意志動詞では成立しないということである。下の例の動詞 *tè* 「死ぬ」と *cá* 「聞こえる」は、どちらも無意志動詞である。そのため、どちらの例も容認されない。動作キャンセルが成立するためには、動詞が意志動詞である必要があるのである。したがって、これ以降の議論で、任意の動詞の動作キャンセルが成立する場合、その動詞は意志動詞である。

- (37) \* *tè=dè. dà=bèmê tè=ló mǎ-yá=bú.*  
 die=REAL this=though die=LO NEG-get=NEG  
 「死んだ。しかし、死ぬことができなかった」

- (38) \* *cá=dè. dà=bèmê cá=lô mǎ-yá=bú.*  
 hear=REAL this=though hear=LO NEG-get=NEG  
 「聞こえた。しかし、聞こえることができなかった」

次に、様々な動詞を例に取って、動作キャンセルがどのような状況を表すのかを具体的に示す。4.1では自動詞、4.2では他動詞を見る。

#### 4.1 自動詞の動作キャンセル

自動詞の動作キャンセルが表す状況には、少なくとも、次の3種類がある：

[A] 動作の完了にともなって動作主 (actor) に生じるはずの状態が生じない場合、[B] 身体を動かそうとして筋肉に力を入れるが、その動作自体を開始することができない場合、[C] 動作に関連する期間や量が想定された基準に達しない場合。

[A] 動作の完了にともなって動作主に生じるはずの状態が生じない

この解釈は、*thàiv* 「座る」、*hlé* 「横になる」、*ʔeiʔ* 「寝る」、*thá* 「立つ」などの変化動詞の場合に可能である。

- (39) *thàiv=dè. dà=bèmê thàiv=lô mǎ-yá=bú.*  
 sit=REAL this=though sit=LO NEG-get=NEG  
 「座った。しかし、座ることができなかった」

- (40) *ʔeiʔ=tè. dà=bèmê ʔeiʔ=lô mǎ-yá=bú.*  
 sleep=REAL this=though sleep=LO NEG-get=NEG  
 「寝た。しかし、寝ることができなかった」

例 (39) が表す状況は例えば次のようなものである：「私は椅子に座ろうとして脚を少し曲げた。しかし、脚が痛かったなどの理由で、腰が椅子に接触する

まで脚を曲げることができなかった」。すなわち、「座る」という動作が完了すれば、腰が椅子に接触した状態が生じるはずである。しかしそれが生じなかったのである。(40) は、「私は眠ろうと思って目をつぶったが、眠ることができなかった」というような状況を表す。ここでは眠った状態が生じなかったのである。先ほど、動詞 *thá* 「立つ」を用いた (34) の例で、「私は最初椅子に座っていた。次に私は立とうとして腰を椅子から浮かした。しかし、脚が痛かったなどの理由で、直立した状態に至らなかった」という状況を示した。この状況はここに分類できる。

[B] 動作主が身体を動かそうとして筋肉に力を入れるが、その動作自体を開始することができない

これは動作キャンセルの中で最も注目すべきケースである。なぜなら、動作自体が開始しないからである。先に示した (34) の文連続は次のような状況を表すこともできる：「私は立とうとして脚の筋肉に力を入れた。しかし、脚が痛かったなどの理由で、まったく脚を動かすことができず、腰を椅子から浮かすことさえできなかった」。この状況で動作者は、筋肉に力を入れただけなので、動作自体は開始していないのである。他の例を示す。

- (41) *thàiv=dè. dà=bèmê thàiv=lô mǎ-yá=bú. (=39)*  
 sit=REAL this=though sit=LO NEG-get=NEG  
 「座った。しかし、座ることができなかった」

- (42) *cauʔ=tè. dà=bèmê cauʔ=lô mǎ-yá=bú.*  
 walk=REAL this=though walk=LO NEG-get=NEG  
 「歩いた。しかし、歩くことができなかった」

- (43) *yì=dē. dà=bèmê yì=ló mǎ-yá=bú.*  
 laugh=REAL this=though laugh=LO NEG-get=NEG  
 「笑った。しかし、笑うことができなかった」

例 (41) は (39) と同じ例である。この文連続は、(39) で示した状況とは異なる次のような状況をも表すことができる：「私は椅子に座ろうとして、脚の筋肉に力を入れた。ところが、脚が痛かったなどの理由で、まったく脚を動かすことができなかった」。 (42) も次のような状況を表すことができる：「私は歩こうとして筋肉に力を入れたが、脚が痛かったなどの理由で、まったく脚を動かすことができなかった」。同様に、(43) が表す状況は例えば次のようなものである：「笑おうとして顔の筋肉を動かそうとした。しかし、恐怖心のため、笑った顔にならなかった」。いずれの状況においても、筋肉に力を入れただけだから、動作そのものは開始していない。これらの例においては、動作そのものが終端と捉えられているのだと考えられる。この読みが可能な動詞として、*hlou?* 「動く」、*thá* 「立つ」、*tháiv* 「座る」、*pyé* 「走る」、*pyóuv* 「微笑む」、*cau?* 「歩く」、*yì* 「笑う」が見つかっている。すべて、日常的によく行う基本的な動作を表す自動詞である。

[C] 動作に関連する期間や量が想定された基準に達しない

この読みはあらゆる自動詞で可能である。例を示す。

- (44) *pyé=dē. dà=bèmê pyé=ló mǎ-yá=bú.*  
 run=REAL this=though run=LO NEG-get=NEG  
 「走った。しかし、走ることができなかった」

この例は例えば次のような状況を表すことができる：「私は1時間走り続けようと思った。しかし、途中で疲れて走ることができなかった」。また、(45) は例えば次のような状況を表す：「柵を跳び越えようとして跳んだ。しかし、高

さが足りず、跳び越えることができなかった」。

- (45) *khòuv=dē. dà=bèmê khòuv=ló mǎ-yá=bú.*  
 jump=REAL this=though jump=LO NEG-get=NEG  
 「跳んだ。しかし、跳ぶことができなかった」

#### 4.2 他動詞の動作キャンセル

他動詞の動作キャンセルが表す状況には、少なくとも、次の7種類がある：

[A] 目的語の指示対象に生じるべき状態や移動が生じない場合、[B] 動作主が目的語の指示対象に接触しない場合、[C] 動作主が目的地に到着しない場合、[D] 目的語の指示対象が出現しない場合、[E] 動作主が目的語の指示対象を知覚できない場合、[F] 動作主が目的語の指示対象に期待する行為が行われない場合、[G] 動作に関連する期間や量が想定された基準に達しない場合。

[A] 目的語の指示対象に生じるべき状態や移動が生じない

この読みは、*khwé* 「割る」、*shou?* 「破く」、*che?* 「煮る」、*chó* 「折る」、*kín* 「焼く」、*ta?* 「殺す」、*phyê?* 「壊す」のように対象 (patient) の物理的変化を表す動詞や、*chá* 「落とす」、*chu?* 「脱ぐ」、*pyi?* 「投げる」、*khó* 「盗む」、*phwìv* 「開ける」、*núv* 「押す」、*té* 「運ぶ」のように対象の移動を表す動詞の場合に可能である。

- (46) *khwé=dē. dà=bèmê khwé=ló mǎ-yá=bú.*  
 split(vt)=REAL this=though split(vt)=LO NEG-get=NEG  
 「割った。しかし、割ることができなかった」

- (47) *chá=dê. dà=bèmê châ=ló mǎ-yá=bú.*  
 drop(vt)=REAL this=though drop(vt)=LO NEG-get=NEG  
 「落とした。しかし、落とすことができなかった」

例 (46) は、例えば次のような、対象に変化が生じない状況を表す：「私はココ椰子の実を割ろうとして叩いた。しかし割れなかった」。(47) は例えば次のような、対象に移動が生じない状況を表す：「私は壁の高いところに掛けてある絵を棒で突いて落とそうとした。棒は絵に届いたが、絵は落ちなかった」。次の (48) は例えば次のような状況を表す：「私は果物を食べようとして口に入れたが、固くて噛めず (あるいは腐っていて)、飲み込めなかった」。これは対象の移動が生じない場合と考えることができる。

- (48) *sá=dê. dà=bèmê sá=ló mǎ-yá=bú.*  
 eat=REAL this=though eat=LO NEG-get=NEG  
 「食べた。しかし、食べることができなかった」

次の (49) は次のような状況を表す：「私は本を買おうとして店に行ったが、欲しい本がなかったので入手できなかった」。入手できれば買った本が動作主のところへ移動するはずだが、この状況ではそのような移動がなかったのである。

- (49) *wè=dê. dà=bèmê wè=ló mǎ-yá=bú.*  
 buy=REAL this=though buy=LO NEG-get=NEG  
 「買った。しかし、買うことができなかった」

次の (50) が表す状況は例えば次のようなものである：「私は話そうとしたが、緊張して声が出なかった」。「言葉が口から出てくる」という事態を抽象的な移動と解釈すれば、これは移動が生じない例と考えることができる。

- (50) *pyó=dê. dà=bèmê pyó=ló mǎ-yá=bú.*  
 speak=REAL this=though speak=LO NEG-get=NEG  
 「話した。しかし、話すことができなかった」

[B] 動作主が目的語の指示対象に接触しない

この読みは、*yai?* 「叩く、殴る」、*kai?* 「かむ」、*kàiv* 「つかむ」、*pu?* 「こする」、*kàv* 「蹴る」など、対象に接触する動作を表す動詞の場合に可能である。

- (51) *yai?=dê. dà=bèmê yai?=ló mǎ-yá=bú.*  
 strike=REAL this=though strike=LO NEG-get=NEG  
 「叩いた。しかし、叩くことができなかった」

- (52) *kàiv=dê. dà=bèmê kàiv=ló mǎ-yá=bú.*  
 hold=REAL this=though hold=LO NEG-get=NEG  
 「つかんだ。しかし、つかむことができなかった」

例 (51) が表す状況は例えば次のようなものである：「私は猿を棒で叩こうとした。しかし棒が短くてとどかなかった」。同様に、(52) が表す状況は例えば次のようなものである：「私はやかんを持とうとして触ったが、熱かったので持てなかった」。このように、いったん触っていても、密な接触がなければキャンセルが可能である。

[C] 動作主が目的地に到着しない

この読みは、*twá* 「行く」、*là* 「来る」、*pyàv* 「帰る」、*te?* 「のぼる」、*shiv* 「降りる」など、移動を表す動詞の場合に可能である。(53) は例えば次のような状況を表す：「私はオフィスに行こうとして家を出発したが、道路が工事で塞がっていて、到着できなかった」。

- (53) *tʷá=dē. dà=bèmê tʷá=ló mǎ-yá=bú.*  
 go=REAL this=though go=LO NEG-get=NEG  
 「行った。しかし、行くことができなかった」

## [D] 目的語の指示対象が出現しない

この読みは、*tú*「掘る」、*louʔ*「作る」、*yeʔ*「編む」、*shauʔ*「建てる」など、作成物を表す名詞句を目的語として取る動詞の場合に可能である。(54)は例えば次のような状況を表す：「私は土を掘って穴を作ろうとしたが、土が固くて穴が作れなかった」。

- (54) *tú=dē. dà=bèmê tú=ló mǎ-yá=bú.*  
 dig=REAL this=though dig=LO NEG-get=NEG  
 「掘った。しかし、掘ることができなかった」

## [E] 動作主が目的語の指示対象を知覚できない

この読みは、*cí*「見る」、*ná tháun*「聞く」など、知覚を表す動詞の場合に可能である。(55)は例えば次のような状況を表す：「私は目を開いて彼の顔を見ようとしたが、暗くて見えなかった」。

- (55) *cí=dē. dà=bèmê cí=ló mǎ-yá=bú.*  
 look=REAL this=though look=LO NEG-get=NEG  
 「見た。しかし、見ることができなかった」

## [F] 動作主が目的語の指示対象に期待する行為が行われない

この読みは、*pé*「与える」、*yáun*「売る」、*pyá*「見せる」、*táun*「頼む、要求する」など、有生物目的語が意志的に何かを行わないと目的が達成されないような動作を表す動詞の場合に可能である。(56)は、例えば次のような状況を表す：「私は友人に贈り物を渡そうとしたが、友人は受け取らなかった」。

- (56) *pé=dē. dà=bèmê pé=ló mǎ-yá=bú.*  
 give=REAL this=though give=LO NEG-get=NEG  
 「(贈り物を) やった。しかし、やることができなかった」

他の動詞の場合も同様の状況を表す。*yáun*「売る」：「私は客に売ろうと思ったが、買わなかった」；*pyá*「見せる」：「私は友人に写真を見せようとしたが、友人はそれを見なかった」；*táun*「頼む」：「私は友人に金を要求したが、友人は金をくれなかった」。

## [G] 動作に関連する期間や量が想定された基準に達しない

この読みは、あらゆる他動詞で可能である。(57)は例えば、「私は1時間食べ続けようと思ったが、時間が1時間に達しなかった」あるいは「私はマンガを1個食べようと思ったが、大きくて全部は食べられなかった」というような状況を表す。同様に(58)は、「私は3時間本を読もうと思ったが、3時間に達しなかった」あるいは「本を100ページ読もうと思ったが、100ページに達しなかった」というような状況を表す。

- (57) *sá=dē. dà=bèmê sá=ló mǎ-yá=bú. (=48)*  
 eat=REAL this=though eat=LO NEG-get=NEG  
 「食べた。しかし、食べることができなかった」

- (58) *phaʔ=tè. dà=bèmê phaʔ=ló mǎ-yá=bú.*  
 read=REAL this=though read=LO NEG-get=NEG  
 「読んだ。しかし、読むことができなかった」

## 4.3 動作キャンセルの本質

上で見てきたことから明らかのように、動作キャンセルは、意志動詞が表す何らかの動作が途中まで行われたにもかかわらず、その動作の終端 (end

point) には達しなかったことを表す。ここから言えることは、ビルマ語の意志動詞が意味論的には終端への到達を含意 (entail) しないということである。面白いことに、4.1 [B] に示した場合のように、動作そのものが終端と見なされ、キャンセルできることもある。

確かに、*thàiv=dê* (sit=REALIS) 「座った」と言った後に、動作を否定する文を続けなければ、「座る」という動作の終端である「腰が床や椅子などに接触している状態」が実現したと聞き手には理解されることが多い。しかしながら、常に動作キャンセルが可能であることから、このような解釈は語用論的な暗示 (pragmatic implication) であって、意味論の問題ではないと考えられる。

ここで、結果キャンセルと動作キャンセルを比べてみよう。

(59) a. *châ=dê. dà=bèmê châ=lô mǎ-yâ=bú.* (=47)

drop(vt)=REAL this=though drop(vt)=LO NEG-get=NEG

「落とした。しかし、落とすことができなかった」

b. *châ=dê. dà=bèmê mǎ-câ=bú.* (=26)

drop(vt)=REAL this=though NEG-drop(vi)=NEG

「落とした。しかし、落ちなかった」

動作キャンセルの例 (59a) は、落とそうとしたが落ちなかったことを表している。すなわち、この文が表す状況は結果キャンセルの (59b) とほとんど同じである。この事実を考えると、3 で見た結果キャンセルは、動作キャンセルと本質的には同じ現象であると見なすことができる。結果キャンセルと動作キャンセルはどちらも、ビルマ語の意志動詞が意味論的に終端への到達を含意しないことに起因する現象なのである。

## 5. キャンセルが不可能な場合

ここまでの考察で、ビルマ語の事象キャンセルは、ビルマ語の意志動詞が終

端への到達を含意しないことが原因であることが分かった。しかし、ある種の形式が現れると、意志動詞を用いた文は終端への到達を含意する。例えば、終了を表す表現 *V=pi=bi* 「(～し) 終わった」を用いると、事象キャンセルが不可能になる。(60) はこの表現を用いた文である。この文は、動作が終端に到達したことを含意する。したがって、この文の後に動作をキャンセルする文を置いた (61) は、容認されない。

(60) *sá=pi=bi.*

eat=finish=PI

「食べ終わった」

(61) \**sá=pi=bi. dà=bèmê sá=lô mǎ-yâ=bú.*

eat=finish=PI this=though eat=LO NEG-get=NEG

「食べ終わった。しかし、食べることができなかった」

また、目的となる事象を表す従属節標識 *=?àuv* 「(～する) ように、(～になる) ように」を用いて、結果事象を文中で言明した (62) のような文も、結果のキャンセルがしにくくなる。(63) に示すとおりである。

(62) *tè=?àuv ta?=tè.*

die=so.as.to kill=REAL

「ちゃんと殺した (直訳: 死ぬように殺した)」

(63) *?tè=?àuv ta?=tè. dà=bèmê mǎ-tè=bú.*

die=so.as.to kill=REAL this=though NEG-die=NEG

「ちゃんと殺した。しかし、死ななかった」

これらのことから、(60) や (62) のような文における *=pi=bi* や *=àuv* は、

動作が終端に到達したことを表す機能を果たしていると言えるだろう。

## 6. 結論

ビルマ語の事象キャンセルは、意志動詞において可能な現象である。ビルマ語におけるこの現象については、結果キャンセルの存在がティンエイエイコ [2002] によって指摘されていたが、その成立条件については明確にされていなかった。ビルマ語の結果キャンセルは動作キャンセルと本質的には同じ現象であり、どちらも、ビルマ語の意志動詞が終端への到達を含意しないことに起因するのである。これが本稿の結論である。

これまで、日本語において事象キャンセルが論じられる場合、結果キャンセルが考察の対象になっていて、動作キャンセルが論じられることはほとんどなかった。それはおそらく、日本語においては動作キャンセルの容認度が非常に低いからである。例えば、日本語で「立ったけれど立てなかった」や「殺したけど殺せなかった」は容認度が非常に低い。一方、ビルマ語においては、同様の表現が問題なく許容される。特に興味深いのは、4.1 [B] に示したケースのように、動作自体が開始しないという解釈が可能な場合もあるということである。

ビルマ語の意志動詞が終端への到達を含意しないことを理解しておくことは、ビルマ語学習においても重要なことだと思われる。というのは、次のように、ビルマ語話者でなければ論理的に奇妙に感じられるかもしれない事例が散見されるからである。(64) は小説に現れた例、(65) はラジオドラマの台詞、(66) は 1990 年代の政府のスローガンである。

(64) *cānò=gá pyàn mé=lai²=ti.*

1sg=KA again ask=decisively=REAL

*dòdò ?áin=hà thwe² pò mā=là=bà.*

but voice=TOP go.out appear NEG=come=POL

「私は尋ね返した。しかし、声が出てこなかった」(Myawadi, 1954.3: 171)

(65) *yàngòun-dá=gò pālwe² hmou²=khai²=lai²=tà lè.*

Yangon-male=KO flute blow=CAUS=decisively=REAL SFP

(中略) *tù mā-kain=yé=dō=bú lè.*

3sg NEG-hold=dare=anymore=NEG SFP

「ヤンゴン男に笛を吹かせたんだよ。... (しかし、その笛を) 彼は持とうともしなかったのさ」(*?ānàđáji=myá yizá thá=dō*)

(66) *bèdù khwé khwé, dō mā-kwé=bà.*

who split(vt) split(vt) we NEG-split(vi)=POL

「誰が (ミャンマーを) 崩しても、我々は崩れない」

また、任務を全うするよう命令する際に、「…になるよう、～せよ」と直訳できる、(62) でも見た、次のような表現がよく使われることも知っておくべきである。これも、ビルマ語の意志動詞が終端への到達を含意しないことを反映していると思われる。

(67) *tè=?aun ta²=pà.*

die=so.as.to kill=POL

「ちゃんと殺せ (直訳: 死ぬように殺せ)」



(68) *cá=ʔəuɴ chá=bà.*

drop(vi)=so.as.to drop(vt)=POL

「ちゃんと落とせ (直訳: 落ちるように落とせ)」

結果キャンセルは、日本語以外でも、中国語 [Tai 1984]、タミール語 [Talmy 1991] などで報告されている。また、筆者自身の調査によれば、ビルマ語に隣接する言語であるポー・カレン語 (Pwo Karen) においては、(69) のような結果キャンセルも、(70) のような動作キャンセルも、問題なく可能である (この事実は既に加藤 [1996] や Kato [1999] で指摘した)。

(69) *ja mà θi ʔəwé. lānānθi θi ʔé.*

1sg CAUS die 3sg but die not

「私は彼を殺した。しかし彼は死ななかった」

(70) *ja chīthəuɴ. lānānθi chīthəuɴ nī ʔé.*

1sg stand.up but stand.up can not

「私は立った。しかし立てなかった」

Phan Thi My Loan [p.c.] によれば、ベトナム語においても、(71) のように結果キャンセルが可能である。しかし、(72) に示すとおり、動作キャンセルはできない。

(71) *Tôi đã giết nó. Nhưng nó chưa chết.*

1sg PST kill 3sg but 3sg not.yet die

「私はやつを殺した。しかしやつは死んでいない」

(72) \**Tôi đã đứng dậy. Nhưng tôi không đứng dậy được.*

1sg PST stand get.up but 1sg not stand get.up can

「私は立った。しかし、立てなかった」

一方、宮本マラシー [p.c.] によると、タイ語では次のように結果キャンセルも動作キャンセルも不可能である。

(73) \**phôm khâa khâw. tɛɛ khâw mây taay.*

1sg kill 3sg but 3sg not die

「私は彼を殺した。しかし彼は死ななかった」

(74) \**phôm lúk. tɛɛ lúk mây khun.*

1sg stand.up but stand.up not ascend

「私は立った。しかし立てなかった」

しかし、Thepkanjana and Uehara [2009: 605] は、タイ語においても動詞連続の中では次のように結果キャンセルが生じることを指摘している<sup>5</sup>。

(75) *tamrùat khâa phūuráay mây taay.*

police kill criminal not die

「警察は犯人を殺したが死ななかった」

こうして見ると、ベトナム語やタイ語と比べたとき、ビルマ語やポー・カレン語は、事象キャンセルが可能になる条件が緩いと言えそうである。事象キャンセルは、言語によるこのような程度の差こそあれ、東アジア、東南アジア、南アジアに広く分布しているようである。したがって、この現象は一種の地域特徴である可能性があることをここに指摘しておく。

## [謝辞]

ビルマ語文の容認度について意見をくださった Dr. Shwe Pyi Soe と Dr. Htet Htet をはじめとするビルマ語母語話者の友人達に感謝の意を表したい。また、タイ語とベトナム語について、同僚の宮本マラシー先生 (タイ語)、Phan Thi My Loan 先生 (ベトナム語)、清水政明先生 (ベトナム語) にご教示いただいた。記して御礼を申し上げる。

## [略号]

CAUS - 使役; KA - agent や source を表す格助詞 =ká/=gá; KO - patient, theme, recipient, goal などを表す格助詞 =kò/=gò; LO - 従属節標識 =lò; NEG - 否定; PI - 完了 (perfect) のような意味を表す助詞 =pi/=bi; POL - 丁寧; PROG - 継続; PST - 過去; REAL - 現実法; SFP - 文末助詞; TOP - 主題; V - 動詞; vi - 自動詞; vt - 他動詞; 1sg - 一人称単数; 3sg - 三人称単数

## [注]

- 1 ビルマ語では、主節の動詞を否定するとき、動詞の前に接頭辞 mǎ- が、動詞の後に助詞の =phú/=bú が、それぞれ置かれる。=phú/=bú というスラッシュを使った表記については注3を参照のこと。
- 2 東南アジア諸言語の動詞分類には、Enfield [2007: 242] のラオス語動詞の分類法が大いに参考になる。
- 3 無声子音で始まるビルマ語の助詞の多くは、声門閉鎖音の後に現れた場合を除いて、その無声子音が対応する有声子音に交替する。助詞 =tə/=də もそのひとつである。本稿では、このような助詞を引用するとき、スラッシュの前と後にそれぞれ無声と有声の形式を置いて示す。
- 4 対応する2つの動詞 (causative と non-causative) が同形である例としては、ka? 「くっつける; くつつく」と pei? 「閉める; 閉まる」以外にも、ca? 「締める; きつい」、chàw 「緩める; 緩い」、è 「長くする; 長い」、lei? 「まるめる; まるまる」、phyáw 「まっすぐにする; まっすぐな」、sá 「始める; 始まる」、sú 「集める; 集まる」、tó 「短くする; 短い」、tó 「(音を) 小さくする; (音が) 小さい」、yó 「混ぜる; 混ぜる」、ya? 「止める; 止まる」等々がある。
- 5 宮本マラシー [p.c.] によれば、(75) の文はあまり良くないという。容認度に個人差がありそうである。

## [参考文献]

- Cornyn W. S. & R. I. McDavid, Jr.  
1943 Causatives in Burmese. *Studies in Linguistics* 1 (18), 1-6.
- Enfield, N. J.  
2007 *A Grammar of Lao*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 服部四郎 (編)  
1957 『基礎語彙調査票』東京: 東京大学言語学研究室。
- 早津恵美子  
1989 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて——意味的な特徴を中心に——」『言語研究』95, 231-256.
- 池上嘉彦  
1981 「『する』と『なる』の言語学——言語と文化のタイポロジーへの試論——」東京: 大修館書店。
- Ikegami, Yoshihiko  
1985 'Activity' - 'accomplishment' - 'achievement' - A language that can't say 'I burned it, but it didn't burn' and one that can. In Adam Makkai and Alan K. Melby (eds.) *Linguistics and Philosophy. Essays in Honor of Rulon S. Wells*, 265-304. Amsterdam: John Benjamins.
- 影山太郎  
1996 『動詞意味論——言語と認知の接点——』東京: くろしお出版。
- 加藤昌彦  
1996 「ポー・カレン語 (東部方言) の動詞連続における主動詞について」『言語研究』113, 31-61.
- Kato, Atsuhiko  
1999 Two types of causative construction in Pwo Karen. In Tadahiko Shintani (ed.) *Linguistic & Anthropological Study on the Shan Culture Area*, 55-93. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
- 加藤昌彦  
2010 「ビルマ語の「上」を表す名詞の後置詞的用法について」『大阪大学世界言語研究センター論集』4, 31-54.
- 宮島達夫  
1985 「「ドアをあけたが、あかなかった」——動詞の意味における〈結果性〉——」『計量国語学』14 (8), 335-353.
- Okell, John  
1969 *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. London: Oxford University Press.
- 佐藤琢三  
2005 『自動詞文と他動詞文の意味論』東京: 笠間書院。

澤田英夫

1988 「現代ビルマ語における動詞配列の類型について」『言語学研究』7, 73-110.

Sawada, Hideo

1995 On the usages and functions of particles *-koul-ka* in colloquial Burmese. In Yoshio Nishi, James A. Matisoff, and Yasuhiko Nagano (eds.) *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax*. Senri Ethnological Studies no. 41, 153-187. Osaka: National Museum of Ethnology.

Tai, James H-Y

1984 Verbs and times in Chinese: Vendler's four categories. *Papers from the Parasession on Lexical Semantics, Chicago Linguistic Society*, 289-296.

Talmy, Leonard

1991 Path to realization: a typology of event conflation. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 480-519.

Thepkanjana, Kingkarn &amp; Satoshi Uehara

2009 Resultative constructions with "implied-result" and "entailed-result" verbs in Thai and English: a contrastive study. *Linguistics* 47 (3), 589-618.

テインエイエイコ (Thin Aye Aye Ko)

2002 「現代口語ビルマ語における語彙構造と意味特徴——ビルマ語と日本語の対照の観点から——」神戸大学博士論文.

Tsujiura, Natsuko

2003 Event cancellation and Telicity. In William McClure (ed.) *Japanese/Korean Linguistics, Volume 12*, 388-399. Stanford: CSLI Publications.

Vendler, Zeno

1967 *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Wheatley, K. Julian

1982 *Burmese: A Grammatical Sketch*. Berkeley: University of California, Berkeley dissertation.

山川太

2004 「いわゆる日本語の Event Cancellation について」『日本言語学会第 128 回大会予稿集』pp. 227-232.

## Event Cancellation in Burmese

Atsuhiko KATO

As Japanese linguist Yoshihiko Ikegami discussed in his (1981) book while the Japanese sentence *Moyasita keredo, moenakatta* " [I] burned [it] , but [it] didn't burn" is acceptable, its corresponding English translation, *I burned it, but it didn't burn* is not acceptable. The Japanese transitive verb *moyasu* "burn" contains in its logical structure the resultant event in which something burns. However, even when the verb *moyasu* is in the past tense, it does not entail the expected result, i.e., that something burns. In Japanese, as can be seen in this example, verbs do not always entail the realization of the result contained in their meaning, and the negation of the result does not produce a logical contradiction. A similar phenomenon is found in Chinese (Tai 1984). This phenomenon is called event cancellation, and it has been discussed by a number of scholars working on Japanese and Chinese.

In Japanese, event cancellation is not always fully acceptable. Ikegami pointed out that the sentence *Korosita keredo, sinanakatta* " [I] killed [him] , but [he] didn't die" is unnatural. In Burmese, however, the sentence meaning "I killed him, but he didn't die" is totally acceptable. This type of sentence, where the result of the transitive verb is negated, is generally acceptable in Burmese. Sentences such as "I burned it, but it didn't burn," "I broke it, but it didn't break," "I boiled it, but it didn't boil," "I opened it, but it didn't open," and so on are all fine. I refer to this type of event cancellation as "result cancellation." Furthermore, Burmese also allows the type of event cancellation where the action itself seems to be negated, which I call "action cancellation" in this paper. For example, the Burmese sentences "I stood up, but I couldn't stand up" and "I sat down, but I couldn't sit down" are acceptable, whereas their Japanese equivalents

are unnatural.

Burmese allows both result and action cancellation in quite a few cases, but certain types of verbs cannot be cancelled. For example, the Burmese equivalents of "I died, but I couldn't die" and "I heard, but I couldn't hear" are unacceptable. In my paper, I argue that event cancellation in Burmese can be observed only in volitional verbs, and that cancellation is possible because of a semantic property of Burmese volitional verbs. As a conclusion, I will show that volitional verbs in Burmese do not semantically entail the reaching of the end point of a situation.